

続・保育の中の小さなこと大切なこと⑦

守 永 英 子

三学期にはいると、最年長のクラスでは、卒業までに、しておかなければならない仕事に追われて、忙しくなる。

保育者だけが忙しい仕事もあれば、子どもにもしてもらいたい仕事もある。

昨年、秋に、それぞれの子どもが、絵の具でかいた絵を、表紙にして作る、卒業アルバムも出来上がってきているので、子どもに、名前を書いてもらわなければならぬ。例年、アルバムの中に、貼ってあげるはり絵も、作らせた。

こんな毎日が続く中で、私は、ふと、朝の電車の中で、自分の「思い」が、いつもと違うことに気がついた。

朝、保育の場に向う保育者として、今日、展開されるであろう保育について、思い廻らすことは、いつもながらのことであったが、その様相が、いつもと、少し違うのである。

いつもであれば、思い廻らす事柄は、ある時は、T子の友人間のトラブルの多さであったり、S郎の日頃消極的な動き

であったり、K男のグループのあらあらしい行動であったり、又、時には、クラス全体の傾向としての、物の扱いの乱雑さであったりする。

そして、そのような気にかかる、個人や、グループや、クラスの傾向などの、それぞれの情況が、課題として私の前に立ちただかり、私もまた、その課題について思い廻らす。保育の終ったあとや、保育の始まる前はひと時を、気にかかる情況の原因や、私自身の対応の仕方や、その親への働きかけなどを求めて、心が廻るのである。

しかし、保育者が、しなければならぬこと、あるいは、子どもに、させなければならぬように、追われているような忙しい時では、様相が違ってくる。

いつもと違い、思い廻らす心の中心に、「子ども」が、位置していないことに気付いて、私は、はっとした。「子ども」の代りに、「しなければならぬ事柄」が、心の中心を占め

ていたのである。

当然といえは当然のことであった。そして、「忙しい時期」という以外に、とりたてて、特別な情況に置かれているわけではないことに気づき、はっとして、自分に、驚きを感じた。

確かに、心の中心を占めるものが、入れ代るることによって保育の見え方、子どもの見え方が、変るように思われる。

「ひとりの人間」という、トータルな存在としての「子ども」の姿が薄れて、おとなが「させたいこと」「してほしいこと」という物差しを当てた側面だけが拡大されて見えてくる。そのことに気付かず、うっかりそれに身をまかせれば、拡大された面から、「子どもそのもの」を評価するという落とし穴に陥らないとも限らない。

「忙しい時期」に、自分の心の変化に気付いて、はっとした、ということは裏返せば、普段の保育は、それぞれの子どもがそれぞれに成長すべく、「子ども」に焦点を当てて、保育が考えられてきた、ということに他ならない。考えてみれば、以前は、もっと子どもに「させたいこと」「してほしいこと」に、平常も追われていたような気がする。

このように、反省しながらも、卒業という大きな区切りの前には、やはり、いろいろと予定に追われる。三月は、また、行事も立て込む。年長組では、二月後半からの、おひなさま作り、小学校からの招待で、一年生と遊ぶ日、小学校か

らの、ひなまつりへの招待、幼稚園のひなまつり、誕生会、年少児とのお別れ会、などと忙しく、子ども本来の「みずから工夫し、遊ぶ生活」が、著しく減ずる。私の気持も、予定をこなすことに向けられる。

行事が一通り済んで幼稚園生活の最後の日々を、心ゆくまで過ごさせようと心に決めた時、穏やかな気持で、子どもたちを見守ることができ、再び、子どもがトータルな存在として見えてきた。

幼稚園での最後のおべんとうの日、子どもたちは、幼稚園生活を惜しむかのように、実に、生き生きと一日を過ごした。画用紙と割り箸とストローで、動くポイントを工夫した線路を作っている人達、それぞれ好きな紙芝居を作っている人達、砂場全体を使って、裸足で水や砂に取り組んでいる人達。

そして、「そろそろ、かたづけましょうよ」という私に、彼等は、言ったものである。「おねがだからもうちょっと、時間を頂だいよ」

まことに、健康な申し出である。そして、この言葉は、世の中の保育全体に対して、子どもたちが、叫びたい言葉なのではないだろうか、と、ふと思つたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)